特選

結び目

西今町
谷口明美

夏のあらしに連れ去られまいと
無造作に結わえてしまった
日除けの簾
結び目に指先を立てるが
容易には弛まない

こんな瞬時に　還ってくる

紐結びを好んだその人が
結わえたのは
自在な線材でも
便利すぎる吊具でもなく
いつも太めの綿紐だった

風雨に締り　衝撃には柔らかく
強靭だった結び目は
か弱い私の指で
隠れた尻尾のような紐先を引くと
なぞ解きの終末のように
するりと解けた

結び目は
託だったのだろうか

人との交わりは撓やかでなく
解く日を測るように
結んだ人は
前触れもなく還ってくる
指先に

（評）　普段は見過ごしてしまいそうになる「結び目」というささやかな事象が、実は人と人との繋がりとして立ち上がってくる、その着目の新鮮さに脱帽した。これこそ作者だけが持つ眼の確かさだと思う。詩の構成力も新鮮で力作である。

特選

渇く

正法寺町
髙井　豊

死者はよく喉が渇く　からい水を飲んだ死者は　特に　干涸らびて　死んだ死者は特に

死んでいても　喉が渇くものだ　供えた水が毎日からになる　死者が　やって来てごくごく　水を飲むから　それがわかったのは　つい最近のこと

私は　水道から水を汲んで
死者の前に　それを運ぶ

生きつづけることも　喉が渇く　なんだか
風が塩辛い　空気も乾燥している　気がす

るしなにより　言葉が　塩辛い

水を飲んでいってください

もう少し
の　あいだ
たくさんの死に
水を供える　こと

おびただしい死を思いながら　時々死者が
呟く言葉を　ノートに書いている　きょう
も塩辛い言葉をはいたのは　たしかに私

干涸らびてから発見されたくないんだよね

いいかげん　水気の抜けた人が
大声でけらけら
笑っている　声が聞こえる

（評）おびただしい死者達の渇きは私たちの乾きでもある。恐らく筆者の中にある渇きは、“塩辛い”言葉の洪水に押し流されていく自分自身の脱力感だろうか。今を生きる者の困難をうまく捕らえている。

特選

うるおい

馬場二丁目
清水はる

あの―
右の目から
涙がよく出て
困るのです

聴診器を胸の
柔和なおもざしの先生は
わたしを眺め

ああ―
それはよいことです
うるおいのある
証拠です

う・る・お・い

一瞬　遠い彼方に置いて来た
忘却の四文字が
老々五感を　駆けめぐった

頬が　ほっと

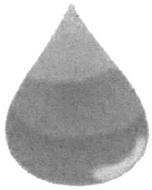
うるおった

一年に一度の
老人健診を終えた
病院の空は
　まっ青

ねぎ畑の一本道を
ペダル漕ぐ足の
何と　軽いこと

右目に　うるおいが甦った

（評）何気ない“うるおい”という言葉が筆者を生き返らせた。日常の中で勇気付けられる言葉のなんと少ないことか。筆者の言葉に反応する新鮮さが魅力だ。



入選

いくたびの春

大藪町
西野　みどり

春の野で摘んだタンポポ
蓮華草で編んだ花かんむり
少女たちの歌う春の歌
若い母に抱かれて
手を伸ばして触れた
生れてはじめての春

立春の光のなかの白無垢
係累の多い旧家の嫁
固い蕾のように未熟だった
美しく咲けると信じた自負
誠実は幼い自己主張のようで
裏目ばかり拾った年月だった

去年百歳の義母を看取った
お弔いと形見分けが終り
親類縁者の足は遠のいた

我が家の跡取りには
コウノトリは来なかった
五月人形も雛飾りも無い

「おばあちゃん」と呼ぶ声も無い

ふりむけば一人の春
花陰から仰ぐ青い空
あの初めての春がある
ただ憂いのない日常
これでよいのかも知れない

あといくたびの春
やり残したこと
叶わなかった夢
萎えた指の間から
愛おしみつつ零す
諦めることの潔さ

春の空はまだ明るい

（評）めぐり来る春を縦糸に、筆者の少女時代から年老いて独りになるまでの長い年月を横糸にして自分の生の変遷をコンパクトにまとめている。ゆるぎない心の流れが見える。終行の「春の空はまだ明るい」に癒される思いだ。

入選

春の淡雪

西今町
松本　トシ子

朝　雪で一面が真っ白だった
ゆうべの内の春の雪

学校へ行く前に
電動の車椅子で走った
シュワー　シュワー　シュワーと
音がして　タイヤの跡が黒かった

電動の車椅子で
大きな円をいくつも描いた
「ミステリーサークル
　　みたいやね」と
誰かが　言った

学校へ行くのに
電動の車椅子のままで
車に乗った　母が運転手だ

ジュッワッ　ジュッワッ
ジュッワッ　と音が変った
なぜだろう

「自動車は重くて
　タイヤも太いからね〜」と
誰かが　言った

人が歩き　車が走り
黒い線がいくつも出来て
雪が解ける

ぼくが描いた
いくつもの円
学校から帰るまでに
消えてしまうのだろう

「春の淡雪やね」と
誰かが　言った

（評）自分の電動車椅子で不自由をものともせず、雪に円を描く筆者の躍動感が素敵だ。春を待つ気持の高揚感も上手く表現されていて、おそらく筆者は若い方だと思うがその前向きの心情がいい。

入選

春になったら

甘呂町
近藤昌子

春になったら　どうなる？
　ゆきがとけるよ
春になったら　どうなる？
　あたたかくなる！
春になったら　どうなる？
　おかあさんとかいものにいけるよ！
　あっそうか　お母さん今病気だもんね
春になったら　どうなる？
　ぼく　おにいちゃんになる！
　弟かな？妹かな？
春になったら　どうなる？
　おっきいくみさんになる！
　じゃあ
　あしたから　あたし5さいさんにいく
　いえいえ　4月になったらね
春になったら　どうなる？
　先生は　この園と
　さよならかもしれない・・・

（評）ちっちゃい組の“ぼく”の目線で筆者は“ぼく”の春待つ気持を書ききっている。筆者の眼の確かさが光っている。終行の「先生とさよなら」は切ない“ぼく”の気持だ。

入選

でんぐり返り

西今町
やまかみ　まさよ

みっつちがいのおしゃまなお姉ちゃんの
することなすこと　物言いまで
じっと見ききしていて
おんなじしぐさをしてみせる
あと数日で二才になる　下の子

――ソレクライナラ
　ウチニモデキルワ

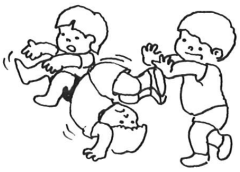
瞳がそういっている
口より先にからだが動いて
ぶかっこうでも　やってみせて
カベにあたっては泣きだす

この星にうまれてきて　まだ七百日のキミ

じぶんの背を毬にしてひとまわり
それだけのことじゃないの
還暦をとうに過ぎた私は思う
　できないと言ってはスネルそぶり
　ぎこちなくてもやりぬこうとする
　負けずぎらいなところ
ちょっとだれかに似ている

――バァバモイッショニヤロウヨ
という顔を
ふいに　こっちにむけた！
泣くワケにもいかない
できないワケは　ない

（評）筆者の温かい眼がお孫さんの世界を上手く書かせた。孫の要求に戸惑う筆者は一緒にでんぐり返りをしたのだろうか。穏かな時間が流れるのを感じる。



佳作

3才って楽しいよ

大藪町　紀本美穂

佳作

夜ふけの童話

池州町　戸田雅子

佳作

鐘を撞く

日夏町　寺村滋

佳作

友からの春

池州町　真野美栄子

佳作

湯水さま、様（さま）

稲里町　川村利男

《総　評》

今年も沢山の方の応募を頂きありがとうございました。ただ、より多くの若い人の参加をお願いしたいと思います。幸い彦根市では文芸活動の高まりを期待して小・中学校生を対象とした「ひこね子ども文化芸術奨励事業」が進められております。書く人の裾野がどんどん広がることを期待したいと思います。

今年の作品はとても素直な作品が多いように感じられました。惜しむらくは今少し掘り下げた中身が欲しかったように思います。もう一ひねりする、即ちもう一度対象を自分だけの眼で見直す、まずはそこから始めたいと思います。対象に対し“常識の眼”でなく“自分の眼”で迫る、あるいは感じることによって事物は、心は生き生きと動き始めます。それが詩を書く楽しみであり、また苦労するところだと思っています。ここに掲載されています作品は著者の独特の着眼点があると思いますので、感じて欲しいと思います。そしてひとりよがりにならないよう他の人の作品をさらに多く読む機会を持って欲しいと思います。

石内秀典

選者詩

森へ

石内秀典

その森へは
小さな川を渡り
暗緑色の椿の葉が
織り成す空間に
丸くぽっかりと空いた
隧道を越える

昼なお暗い
細い道に
烏瓜の実が
いくつか
赤くたれさがり
音もなく笑って
揺れていた

静まり返る
無言の森は
引き返す道を消す

かつてこの森では
出征兵士の壮行会が
日をついであった

母達が
汚れた手ぬぐいを
無言で
握りしめていた
幼なかった眼は
今も覚えている

そこに
神さまは
いたのか

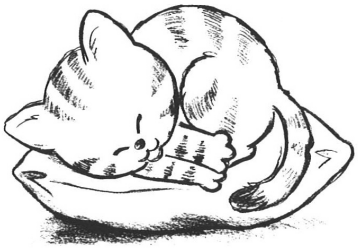
ねむり

尾崎与里子

わたしたちがねむると
うすくひらく耳がある
処暑　夏の終わるとき
樹々から濃く淡く
緑の言葉の布がゆれだし
背中へ
共鳴する翼のかたちをして
いま降っているのは　音だろうか
匂いだろうか

現身が過去の抜け殻だとしたら
空蟬は

寝返りをうつたびに
壁のなかにたたまれていった想い出
もうじゅうぶんなのだと想いつつ
緑の陰でふたたび鳴き始める
そうして
耳管を流れていく静かな傷は
名残惜しい霊魂になって　もっと深く
聴いてはいけないものを聴き
してはいけないことをしてみたいと
一瞬
まだ汗ばんでいる夏のまどろみの
あとにともなく　さきにともなく
声をかけあって
透きとおりながら



きつね

山本英子

ビルとビルの間の
細長く寒い場所に
きつねは住んでいる
陽の射さない場所では影もうつらない
痩せていなければきつねではあり得ないと
気づいた日から
きつねの精神は鋭角にきつく尖っていた

夜更け
完全な満月ののぼるときだけ
きつねの姿は一陣の風に混じり
無人のビル街を走りぬけることがある

おだやかな球状をしたものへの理由のない
報復感に苦しみながら
憤怒に身を削りつつ走るきつねの姿を
深夜の人間のだれも
はるか遠いきつね野のきつね達のだれも
見たものはない

もはやまるまってあたたかい円を描き眠る
ことの絶えたきつねが
明け方のビル街にゆっくりと帰ってきてい
る

荒野の思想に濡れた体毛をぶるっと一はら
いしたきつねの胃の腑の底に
あおい生卵が一つ転がっている